様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００１４１

研究課題名（和文）田中栄三資料のカタロギングによる新派映画の基盤的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Shinpa Films through Cataloguing the Tanaka Eizo Material Collection

研究代表者
上田　学（Ueda, Manabu）

神戸学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０５４６１４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、田中栄三旧蔵資料の整理、調査にもとづき、主に以下の二点を明らかにした。第一に、田中が監督として活躍した日活向島撮影所の京都移転をめぐって、田中の自筆ノート等の分析をおこない、移転の理由が関東大震災以前の日活の経営方針の転換にあったことを明らかにし、その成果を論文として発表した。第二に、過去に研究成果の一部として発表した論文を、新たな田中栄三旧蔵資料の分析を踏まえ、田中の義父にあたる鈴木要三郎の重要性等に関して加筆し、さらに新派映画研究の現代的意義を考察した序論も執筆したうえで、共編著書に収録し刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果にもとづき、神戸映画資料館で開催された「神戸発掘映画祭2021」（神戸映像アーカイブ実行委員会主催）においてプログラム「SPレコードの音で蘇る関西の活弁」を対面・遠隔併用のハイブリッド方式で共催し、研究成果を社会的に発信した。また学術的な研究成果として、共編著『新派映画の系譜学――クロスメディアとしての〈新派〉』（森話社）を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This research clarifies the following two points after cataloguing the Tanaka Eizo Material Collection. First, it clarifies an analysis I conducted on Tanaka's handwritten notes and other materials through which I observed that the reason for the relocation of the Nikkatsu Mukojima Studio where Tanaka was active as a director was a change in Nikkatsu's management policy before the Great Kanto Earthquake. This observation was previously published in a paper. Second, it clarifies that based on the analysis of Tanaka materials, I revised my paper about the energetic activity of Suzuki Yozaburo who was Nikkatsu's company director and Tanaka's father-in-law and the contemporary significance of shinpa films. This revision was presented in a previously edited book we published.

研究分野：映像学

キーワード：映画学　映画史　演劇学　芸能史　日本文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）本研究が試みたのは、新派映画という日本映画のジャンルが、大正期になぜドミナントとなり、それが日本映画の表現的、産業的成立に、どのように寄与したのかについて明らかにすることである。本研究の具体的な対象は、表現面において、欧米映画とは異なるヴァナキュラーな映像表現が定着し、産業面において、国産映画の製作、配給、興行の体制が確立した 1910 年代から、関東大震災により大きく映画製作の環境が変化した 1920 年代半ばまでの新派映画が中心となる。

（2）当該期の新派映画に着目するのは、映画が発明された欧米とは異なる文化圏に位置するにもかかわらず、他の非欧米諸国と比べて、大正期の日本映画は、相対的に安定した製作、流通を実現していたからである。他の非欧米諸国の映画史との比較にみられる、大正期の日本映画の独自性の背景に、新派映画というヴァナキュラーな映像表現の存在を位置づけることができる。本研究は、欧米圏とも非欧米圏とも異なる映画史を形成してきた、日本映画の表現的、産業的形成の独自性の要因を、新派映画の分析から明らかにしようとする試みである。

２．研究の目的

本研究の目的は、新派映画の「後進性」こそが、むしろ後に日本映画独自のオルタナティブな表現形式を生み出すこととなった要因と位置づけ、新劇や新派劇といった日本演劇との関係や、東アジアの映画史的な結びつきを、田中栄三旧蔵資料という独自のノンフィルム(非映像資料)から実証的に明らかにすることにある。具体的に、新派映画の代表的な監督である田中栄三の旧蔵資料についてカタロギングを進め、新劇からの移行、新派劇との表現的関係、東アジアの映画史的連環、という三つの観点から実証的研究をおこない、新派映画を新たな視点から日本映画史に位置づけた。本研究の核となる田中栄三旧蔵資料は、研究代表者の本務校である神戸学院大学の研究室にすべて配架されており、利用に支障なく研究を遂行することができた。

３．研究の方法

本研究は、新派映画に関する三つのテーマに焦点を当て、田中栄三旧蔵資料や、映画雑誌、フライヤー、書簡、SP レコード等のノンフィルムを中心に資料を分析し、実証的研究をおこなった。

第一は、新劇からの移行という問題である。新派映画の製作者は、西洋演劇の導入と日本演劇の近代化を目指した、新劇運動から移行した者が多数を占めていた。その一人に、田中栄三という人物が挙げられる。田中は、新派映画を量産した日活向島撮影所の中心的な監督であり、その後も溝口健二作品等の脚本や、日本映画俳優学校の講師を務めるなど、日本映画界に一定の影響力を有し続けた。本研究の核となるのが田中栄三旧蔵資料であり、これをもとに新劇から新派映画への表現的移行についての分析をおこなった。

第二は、新派劇との表現的関係を明らかにすることである。新派映画の形式的な起源を芸能史に求めるならば、明治期に発生した演劇である新派劇にさかのぼることができることは、新派劇と新派映画という名称の共通性からも明らかである。また連鎖劇における演劇の上演も、新派劇の俳優によって演じられることが多かった。ただし、現存するフィルムからは、西洋的意匠のセットや衣装等、必ずしも新派劇を踏襲しているとは思えない表現がみられる。また新派映画のなかで少なくない作品が、ロシア文学や中国古典の原作に拠っている。これらの新派劇と新派映画の関係について、田中栄三旧蔵資料等の実証的な分析から考察した。

第三に、東アジアの映画史的連環が挙げられる。日本近代においては新派劇が、中国や朝鮮半島の演劇に影響を与えることにつながった。これに関連して、1910 年代に国産映画の製作体制が確立していなかった中国へ、中国語字幕を付与した新派映画を輸出しようとした試みを調査した。これらの新派映画の東アジアへの輸出について、田中栄三旧蔵資料や、その他の渉猟したノンフィルムに基づく実証的な分析を通じて、新派映画を東アジアの映画史的なつながりのなかに位置づけ直した。

４．研究成果

(1) 2020 度は二つのテーマにもとづいて、文献調査を中心に新派映画に関する研究を進めた。第一に、前年度までの科研費「新派映画と「新派的なるもの」の系譜学」（2018-19 年度、挑戦的研究（萌芽））の共同研究で切り開かれた、当該分野への新たな視座を深化させ、田中栄三と日本演劇史、東アジア映画史との関係についての研究を進め、『映画学』34 号の「新派映画特集」に論文を寄稿した。第二に、新派映画を含む無声映画の弁士について、芸能史における浪

花節との連続性、及びメディアとしての活弁 SP レコードの歴史的機能についての研究をおこなった。後者については、活弁が映像から分離して受容されていた事例を明らかにした上で、ボン大学日本・韓国研究専攻が主催したワークショップにて研究成果を発表した。

（2）2021 年度も前年度に引き続き、田中栄三と日本演劇史、東アジア映画史との関係についての研究を進めた。また神戸映画資料館で開催された「神戸発掘映画祭 2021」（神戸映像アーカイブ実行委員会主催）においてプログラム「SP レコードの音で蘇る関西の活弁」を対面・遠隔併用のハイブリッド方式で共催し、ラインハルト・ツェルナー（ボン大学）、湯川史郎（同）、吉原大志（兵庫県立歴史博物館）とともに、ボン大学日本・韓国研究専攻が所蔵する活弁 SP レコード「片岡コレクション」に関する研究成果を発表した。さらに新派映画をテーマとする、小川佐和子（北海道大学）との共編著書（森話社より 2023 年刊行）に関する研究会を早稲田大学戸山キャンパスで開催した。この研究会で、共編著書に寄稿した神山彰（明治大学）、紅野謙介（日本大学）、児玉竜一（早稲田大学）、後藤隆基（同）、斉藤綾子（明治学院大学）、スザンネ・シェアマン（明治大学）、谷口紀枝（日本大学）、田村容子（北海道大学）、土田牧子（共立女子大学）、中村ともえ（静岡大学）の発表および質疑応答を通じて、映画学のみならず、演劇学、音楽学、文学研究の「新派」に関する知見を踏まえた活発な情報交換が実施された。

（3）2022 度は研究最終年度にあたることから、成果の取りまとめと発信に重点的に取り組んだ。主要な成果として第一に、田中栄三が監督として活躍した日活向島撮影所の京都移転をめぐって、田中の自筆ノートを含む資料調査をおこない、移転の理由が関東大震災以前の日活の経営方針の転換にあったことを明らかにした。また、その研究成果を神戸学院大学人文学会第 29 回研究会で口頭発表したうえで、論文として『人間文化』53 号に投稿した。第二に、2020 年度に研究成果の一部として『映画学』34 号に発表した論文を、新たな田中栄三旧蔵資料の調査分析を踏まえて、田中の義父にあたる鈴木要三郎の役割等を中心に加筆し、さらに新派映画を研究する現代的意義を考察した序論も執筆したうえで、小川佐和子（北海道大学）との共編著書（森話社）に収録して刊行した。このような成果の取りまとめと発信から、本研究はその目的に対応する一定の成果を達成したと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 上田学	４．巻 34
２．論文標題 新派映画再考ーーその受容、生成、伝播	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『映画学』	６．最初と最後の頁 22 - 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田学	４．巻 34
２．論文標題 特集について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『映画学』	６．最初と最後の頁 4 - 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田学	４．巻 単行本
２．論文標題 弁士の源流ーー浪花節との関係について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『浪花節の生成と展開 語り芸の動態史にむけて』（真鍋昌賢編、せりか書房）	６．最初と最後の頁 161 - 173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田学	４．巻 53
２．論文標題 関東大震災前後の日活向島 ―京都移転の理由について―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『人間文化』	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 上田学
２．発表標題 活弁SPレコードと無声映画興行の関係について
３．学会等名 片岡コレクション研究会第5回定期講演会（ボン大学・オンライン）
４．発表年 2022年

１．発表者名 上田学
２．発表標題 空間と上映：映画興行の歴史
３．学会等名 Japanese Cinema from Multiple Perspectives（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 上田学
２．発表標題 活弁SPレコードはどのように楽しまれたのか ―映画館との関係から―
３．学会等名 ワークショップ「日本研究における史料としてのSPレコード」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 上田学
２．発表標題 関東大震災前後の日活向島 ―京都移転の理由について―
３．学会等名 神戸学院大学人文学会第29回研究会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 上田学、小川佐和子、児玉竜一、谷口紀枝、斉藤綾子、河野真理江、スザンネ・シェアマン（Susanne Schermann）、紅野謙介、土田牧子、中村ともえ、田村容子、神山彰、後藤隆基	４．発行年 2023年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 464
３．書名 『新派映画の系譜学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関